

昭和40年代ごろまで、琵琶湖とその周辺には、今と比べて、信じられないぐらいたくさんの魚が棲んでいました。ですから、きわめて簡単な方法で魚を捕ることができました。一番簡単な方法は、手づかみでしょう。川岸のウロなどに潜んでいる魚を手を突っ込んで

捕る方法もあります。魚のぬるっとした感覚が、何とも言えない興奮をもたらします。

手づかみの延長とも言える漁具もあります。まず、

雑漁法

こんなに簡単に魚が捕れたの？

図1に示したのが、ドジョウフミと呼ばれるザルです。水路などで、下流にこ

カットしたような形をしています。どのように使うのでしょうか？これは、琵琶湖の湖岸や田んぼなど、水の浅いところにいる魚を捕る魚具で、魚の上からこ

このような漁法で捕られた魚は、日々のおかずとして自家消費され、その伝統が、フナズシや、醤油煮のような、近江独自の食文化を育ててきました。

図2に示したのはフセカゴあるいはオオギと呼ばれる漁具です。円錐の上部を

「田んぼ」と書きました。間違いはありません。水の田の用水と排水が一体とな

これらの漁具を使う漁は、農民が、農業の片手間に水田の周辺で行う、水田漁業ともい

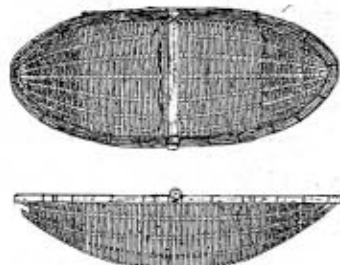


図2 フセカゴ

ついていた時代の田んぼには、多くの魚たちが遡ってきました。魚が居るからには捕らなくてはなりません。しかし、そこには苗が植わっている。当然、魚を捕るのは自分の田んぼではありません。こっそりと魚を捕りをして、田んぼの持ち主に見つかって叱られる。といった光景が湖岸のあち

図1 ドジョウフミ

こちで見られたのでしょ。たともいわれています。こ

(滋賀県立安土城考古博物館 大沼芳幸)